

〔一般論文〕

ジェネリック医薬品の使用に対する薬剤師および患者の意識調査

A Questionnaire Survey of Pharmacist and Patient Attitudes towards Generic Drugs

福本 恭子^{*a}, 大石 美也^b, 大久保 亜弥^c, 大久保 耕嗣^d, 齊藤 幹央^e, 栗原 敬子^e,
三浦 雅彦^f, 山岸 美恵子^g, 小林 貴志^h, 鹿島 亜沙美^h, 鈴木 光幸^h, 三星 知ⁱ,
山田 仁志ⁱ, 上野 和行^a

KYOKO FUKUMOTO^{*a}, MIYA OISHI^b, AYA OHKUBO^c, KOJI OHKUBO^d, MIKIO SAITOH^e, KEIKO KURIHARA^e,
MASAHIKO MIURA^f, MIEKO YAMAGISHI^g, TAKASHI KOBAYASHI^h, ASAMI KASHIMA^h, MITSUYUKI SUZUKI^h,
SATORU MITSUBOSHIⁱ, HITOSHI YAMADAⁱ, KAZUYUKI UENO^a

^a 新潟薬科大学薬学部薬物動態学研究室

^b ダイチク

^c 株式会社市民調剤

^d 越後メディカル

^e 共栄堂 しばたセンター薬局

^f 株式会社 エヌ・エム・アイ

^g 新潟メディカルプラン

^h 済生会新潟第二病院

ⁱ 下越病院

[Received September 11, 2008]
[Accepted December 15, 2008]

Objective: In recent years, in the face of growing pressure exerted by the cost of medical care in Japan, the Ministry of Health, Labour and Welfare has actively promoted the use of generic drugs (GEs) to reduce medical costs. However, the actual consumption of GEs has not demonstrated any clear increase. The aims of this study were to assess the attitudes of patients and pharmacists towards GEs and to propose a strategy for increasing their use.

Methods: We conducted a survey of 479 hospital pharmacists and 356 community pharmacists, as well as 2483 patients in February 2008, using a self-administered questionnaire about attitudes towards GEs.

Result: Most of the pharmacists surveyed provided an affirmative response regarding the use of GEs. However, only 34 % of the hospital pharmacists and 23 % of the community pharmacists said they would agree to use GEs if they were patients. In addition, the recommendation rate for the use of GEs differed among pharmacists: 18 % of the hospital pharmacists and 48 % of the community pharmacists recommended the use of GEs to patients. Although 39 % of the patients agreed to use GEs, the proportion of prescriptions for GEs was only 10 %. Moreover, the recognition rate of GEs by elderly persons was low.

Conclusion: These results suggest that although patients agreed to use GEs, pharmacists showed no assertive action in switching to GEs. To promote the use of GEs, patients and pharmacists need to be better

*〒956-8603 新潟県新潟市秋葉区東島 265-1
新潟薬科大学薬学部薬物動態学
TEL: 0250-25-5279 FAX: 0250-25-5278
E-mail: fukukyo@nupals.ac.jp

informed and educated about GEs by pharmaceutical companies, and through drug education. Increasing knowledge about GEs and enhancing the motivation to use GEs among patients and pharmacists will undoubtedly be an effective strategy for increasing GE use.

Keywords: generic drug, questionnaire survey, pharmacists, patients

近年、国民医療費削減の一環としてジェネリック医薬品（以下 GE 医薬品）の使用が勧められているが、GE 医薬品の使用は促進されていないのが現状である。そこで、GE 医薬品の使用促進における問題点を明らかにすることを目的に、GE 医薬品に関する意識調査を行った。対象は、新潟県内の病院薬剤師 479 名、保険薬局薬剤師 356 名、および新潟県内の保険薬局来局患者 2483 名であり、調査実施期間は 2008 年 2 月の 1 ヶ月間とした。70% の薬剤師が GE 医薬品の使用に賛成していた。しかし、患者として服用したいと答えた薬剤師は、病院薬剤師 34%、保険薬局薬剤師 23% であった。GE 医薬品への変更を勧めている薬剤師は、病院薬剤師 18%、保険薬局薬剤師 48% であり、薬剤師は GE 医薬品の使用に賛成しているが不安も多く、それは病院薬剤師で強い傾向が認められた。

GE 医薬品を服用希望のある患者は 39% であったが、実際に GE 医薬品を服用しているのは 10% であった。GE 医薬品という言葉を知らない患者ほど有意に高齢であった。本結果では、病院薬剤師と保険薬局薬剤師共に、ジェネリック医薬品の使用には強く賛成していることが認められた。しかし、使用に関しては不安を持っていることや、実際に患者としてジェネリック医薬品を服用するには迷いがあることが明らかとなった。患者側には GE 医薬品の選択希望はあるが、処方せんに GE 医薬品が含まれているかを知る患者は少数であることが明らかとなった。GE 医薬品に対する薬剤師および患者の意識向上を図るための教育環境の育成が必要であることが示唆された。

キーワード：ジェネリック医薬品、先発医薬品、意識調査、薬剤師

緒 言

わが国の国民医療費は 2005 年度に約 33 兆円に達し、これは国民所得の 9% に当たり、年々増加していることが問題となっている¹⁾。そこで国民医療費削減の一環としてジェネリック医薬品の使用が勧められている。2006 年 4 月の改定では、処方せんに「後発医薬品への変更可」のチェック欄を設け、処方せんに記載した先発医薬品をジェネリック医薬品に変更しても差し支えない旨の処方医による意思表示が行いやすくなった。近年、企業によるジェネリック医薬品に関する広告の影響もあり、広く国民にジェネリック医薬品という言葉そのものは浸透していると考えられるが、2007 年 7 月の保険薬局における調査では、「後発医薬品への変更可」欄に処方医の署名等がある処方せんのうち、実際にジェネリック医薬品に変更された処方せんの割合は 8.2% であり²⁾、先発医薬品からジェネリック医薬品に変更された処方せんの割合は低く、ジェネリック医薬品の普及は十分とはいえない状況が明らかとなっている。そこで、ジェネリック医薬品の有効利用推進と、それに関わる薬剤師への支援を目的に、薬剤師

および患者を対象にジェネリック医薬品に対する意識調査を行い、現状および問題点を把握すると共に、ジェネリック医薬品の使用促進のための指針について検討した。

方 法

1. 対象

新潟県に所在する医療機関および保険薬局に在籍する薬剤師を対象に、ジェネリック医薬品に関する自記入式アンケートを郵送により配布および回収し調査を実施した。同様に、新潟市内に所在する保険薬局に来局した患者を対象に、ジェネリック医薬品に関する自記入式アンケートを配布し、配布日に回収した。調査実施期間は 2008 年 2 月の 1 ヶ月間とし、保険薬局来局患者に対するアンケートは、調査期間のうち任意の 2 週間を配布・回収期間とした。

また、本学の 3 年生 192 名を対象に、ジェネリック医薬品の品質および医療経済からみたジェネリック医薬品の有効利用に関する講義の前後にアンケートを配布および回収し、ジェネリック医薬品に対する意識調査を行った。

2. 解析

統計解析ソフトには、エクセル統計 Statcel を用い、検定には t 検定を行った。

3. 設問項目

アンケートの設問は Table 1 ～ 3 の通りである。

結 果

病院薬剤師 479 名（男性 204 名、女性 270 名、不明 5 名）、保険薬局薬剤師 356 名（男性 113 名、女性 243 名）より回答を得た。平均年齢は、病院薬剤師 38.5 歳、保険薬局薬剤師 33.4 歳であった。回

収率は、病院薬剤師 68.2 %、保険薬局薬剤師は 74.9 %であった。また 2483 名（男性 913 名、女性 1539 名、不明 31 名）の患者より回答を得た。平均年齢は、52.6 歳であった。

1. 薬剤師対象アンケート

1-1. ジェネリック医薬品の使用に対する意識

「ジェネリック医薬品の使用に賛成でしょうか」（設問 2）には、病院薬剤師 70.1 %、保険薬局薬剤師 77.0 %が賛成した。一方で、「ジェネリック医薬品に対して不安をもたれていますか」（設問 3）には、「不安がある」と答えたのは、病院薬剤師 85.4 %、

Table 1 薬剤師対象アンケート

設 問		選択肢
1	年齢、性別	
2	ジェネリック医薬品の使用に賛成でしょうか。	賛成、反対
3	ジェネリック医薬品に対して不安をもたれていますか。	はい、いいえ
4	「はい」と答えられた方へ、ジェネリック医薬品に対して不安と思うところは何でしょうか。	同等性、副作用、情報不足、安定供給、その他
5	薬剤師からジェネリック医薬品への変更を勧めていますか。	はい、ときどきある、ない
6	「勧めていない」と答えられた方へ、変更を勧めない理由は何でしょうか。	安全性が十分でないと判断している、情報不足で分からない、ジェネリック医薬品への変更の指示がない、安定供給が不安、在庫管理が大変、業務量が増える、その他
7	ジェネリック医薬品についてもっと知りたいと思いますか。	はい、いいえ、どちらでもない
8	もしあなたが患者としたらジェネリック医薬品を服用しますか。	服用する、服用しない、どちらでもない

Table 2 患者対象アンケート

設 問		選択肢
1	年齢と性別	
2	ジェネリック医薬品という言葉をご存知でしたか。	はい、いいえ
3	「はい」と答えられた方へ、最初に何で知りましたか、あるいは誰に教えられましたか。	テレビ、新聞、ポスター・パンフレット類、医師、薬剤師、知人、その他
4	ジェネリック医薬品を服用したいと思いますか。	はい、いいえ、どちらでもない
5	「いいえ」と答えられた方へ、服用したくない理由は何でしょう。	効果に対して不安がある、副作用に不安がある、今の薬を変えたくない、その他
6	服用されている薬の中にジェネリック医薬品が含まれていますか。	含まれている、含まれていない、わからない
7	「含まれている」と答えた方へ、ジェネリック医薬品を服用した感想を教えてください。	薬の費用が安くなった、効果が上がった気がする、効果が下がった気がする、その他
8	ジェネリック医薬品の使用に関して、医師・薬剤師に相談されたことはありますか。	はい、いいえ
9	薬の費用が高いと思いますか。	高い、普通、高くない、わからない
10	1ヶ月の薬の費用は大体どの程度でしょうか。	自己負担なし、1000 円以下、1000 ～ 2500 円、2500 ～ 5000 円、5000 ～ 10000 円、10000 円以上
11	健康保険は次のうちどれでしょう。	国民健康保険、社会保険、共済組合保険

Table 3 講義前および講義後における学生対象アンケート

設問（設問 1, 2 は講義前のみ）		選択肢
1	ジェネリック医薬品という言葉をご存知でしたか。	はい、いいえ
2	「はい」と答えた学生へ、最初に何で知りましたか、あるいは誰に教えられましたか。	テレビ、新聞、ポスター・パンフレット類、医師、薬剤師、知人、本講義、その他
3	もし患者としたら、ジェネリック医薬品を服用したいと思いますか。	はい、いいえ、どちらでもない
4	「いいえ」と答えた学生に対して、服用したくない理由は何でしょうか。	効果に対して不安がある、副作用に不安がある、わからないため先発薬がいい、その他
5	親族に患者がいたら、ジェネリック医薬品を勧めますか。	はい、いいえ、どちらでもない
6	ジェネリック医薬品の使用に賛成でしょうか。反対でしょうか	賛成、反対
7	医療経済的な考え方は薬剤師にとって非常に大きな問題であることを認識していますか。	はい、いいえ、どちらでもない

Table 4 病院および保険薬局薬剤師のジェネリック医薬品に対する不安感と不安理由（設問 3,4）

回 答	病院薬剤師 (%)	保険薬局薬剤師 (%)
はい	85.4	81.2
同等性	32.2	28.7
情報不足	30.1	25.9
安定供給	19.7	26.2
副作用	14.9	16.2
その他	3.1	3.0
いいえ	13.4	18.5
その他	1.2	0.3

保険薬局薬剤師 81.2 %であった（Table 4）。その理由は、同等性、情報不足が多く、保険薬局薬剤師は安定供給も不安材料として上位にあげていた。

1-2. ジェネリック医薬品への変更に対する意識

「ジェネリック医薬品への変更を勧めていますか」（設問 5）に「いいえ」と回答したのは病院薬剤師 79.5 %，保険薬局薬剤師 51.1 %であった（Table 5）。勧めていない理由は、病院薬剤師では「その他」が最も多く、次に「変更指示がない」、「情報不足で分からない」が上位を占めていた。一方、保険薬局薬剤師では「変更指示がない」、「在庫管理が大変」、「情報不足で分からない」が上位を占めていた。

ジェネリック医薬品への変更に対する意識について、年齢別に解析した結果を Fig. 1 に示す。病院薬剤師および保険薬局薬剤師共に、変更を勧める割合は年齢が高くなるにしたがい増加傾向にあったが、いずれの年齢層においても病院薬剤師は 70 %以上が変更を勧めていなかった。

Table 5 病院および保険薬局薬剤師によるジェネリック医薬品への変更有無（設問 5,6）

回 答	病院薬剤師 (%)	保険薬局薬剤師 (%)
はい	2.1	7.3
時々ある	16.1	41.6
いいえ	79.5	51.1
ジェネリック医薬品への変更指示がない	22.1	23.9
情報不足で分からない	17.8	18.1
在庫管理が大変	10.9	20.8
安全性が十分でないと判断している	11.4	6.4
安定供給が不安	7.1	13.1
業務量が増える	3.5	10.6
その他	27.2	7.2
その他	2.3	0.0

1-3. ジェネリック医薬品に関する情報の収集への意識

「ジェネリック医薬品についてもっと知りたいと思いますか」（設問 7）に、「はい」と回答したのは病院薬剤師 53.9 %，保険薬局薬剤師 75.9 %であった。「いいえ」と回答したのは、病院薬剤師 5.1 %，保険薬局薬剤師 10.0 %とわずかであった。ジェネリック医薬品に関する情報の収集への意識について、年齢別に検討した結果、「ジェネリック医薬品についてもっと知りたいと思いますか」（設問 7）に、「はい」と答えたのは、病院薬剤師、保険薬局薬剤師共に 20 代が最も高く、病院薬剤師では 66.9 %，保険薬局薬剤師では 81.5 %を占めた。病院薬剤師では 50 代以上で 42.3 %に減少したが、保険薬局薬剤師では年齢に関わらず約 70 %を占め、保険薬局薬剤

師がジェネリック医薬品に関する情報の収集を強く望んでいることが示唆された。一方、「どちらでもない」との回答は病院薬剤師で平均 35.9 %を占め、これは年齢の上昇とともに増加傾向にあった。

1-4. 患者の立場とした場合のジェネリック医薬品の選択に対する意識

患者の立場とした場合のジェネリック医薬品の選択に対する意識について、結果を Fig. 2 に示す。「もしもあなたが患者としたらジェネリック医薬品を服用しますか」(設問 8)に「服用する」と回答したのは、病院薬剤師 33.3 %, 保険薬局薬剤師 42.5 %であった。一方、「どちらでもない」と回答した薬剤師のうち(病院薬剤師 32.5 %, 保険薬局薬剤師 34.1 %), 設問 2 で「ジェネリック医薬品の使用に賛成でしょうか」に「賛成」と回答したのは、病院薬剤師 74.8 %, 保険薬局薬剤師 76.9 %であった。したがって、自身における服用の意思が明確でない薬剤師においても、ジェネリック医薬品の使用を賛成する割合は高かった。

2. 患者対象アンケート結果

2-1. ジェネリック医薬品の認知状況

「ジェネリック医薬品という言葉をご存知でしたか」(設問 2)に「知っている」と回答した患者は 70.0 %であった。ジェネリック医薬品の認知状況を年齢別に検討した結果を Fig. 3 に示す。ジェネリック医薬品という言葉を知っている群の平均年齢は 49.3 歳, 知らない群の平均年齢は 60.2 歳であり, 認知度が低いほど有意に高齢であった ($P<0.001$)。「知っている」と回答した患者に対する設問である「最初に何で知りましたか」には, 71.3 %の患者がテレビから情報を得たと回答した。

2-2. ジェネリック医薬品の服用に対する意識

「ジェネリック医薬品を服用したいと思いますか」(設問 4)に, 39.1 %が「はい」, 11.6 %が「いいえ」, 40.3 %が「どちらでもない」と回答した (Table 6)。「いいえ」と回答した患者の服用したくない理由は, 「今の薬を変えたくない」が 31.4 %と最も多かった。

2-3. 服用中の薬に対する認識

「服用されている薬の中にジェネリック医薬品が

Fig. 1 病院および保険薬局薬剤師によるジェネリック医薬品への変更有無に対する年齢別解析

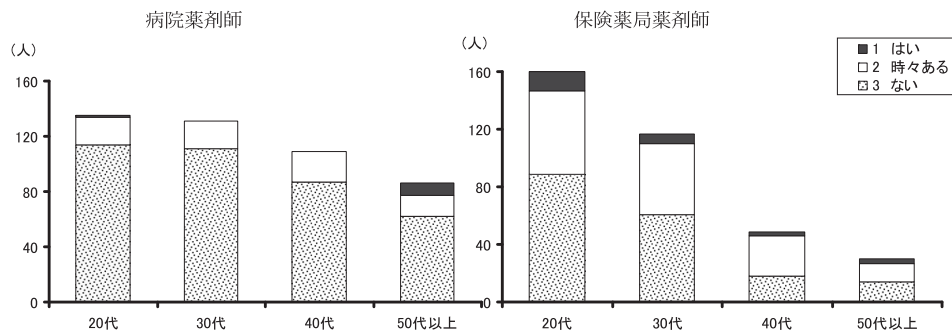


Fig. 2 病院および保険薬局薬剤師によるジェネリック医薬品の服用可否

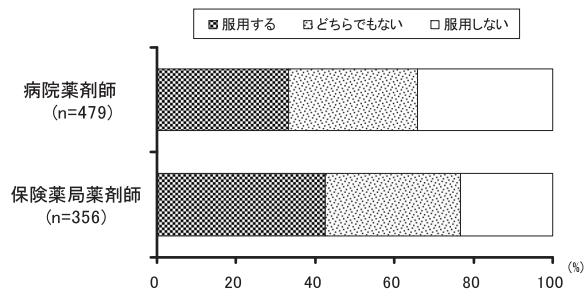
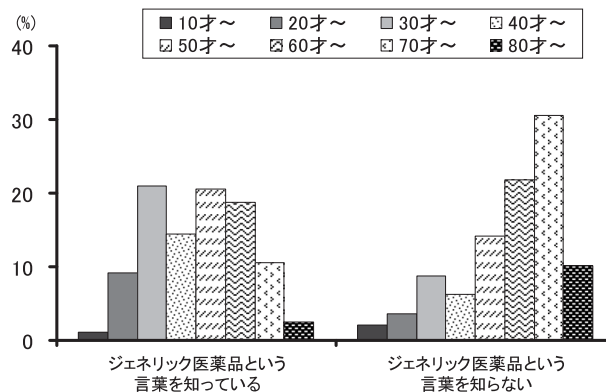


Fig. 3 患者によるジェネリック医薬品に対する認識への年齢別解析 (設問 2)



含まれていますか」(設問 6) に、10.3 %が「含まれている」と回答した (Table 7)。設問 6 で「含まれている」と回答した患者のジェネリック医薬品に対する認識は、「費用が安くなった」と感じた患者が 59.2 %を占めた。一方、「効果が下がった」と感じた患者は 1 名のみであった。

服用中の薬に対する認識とジェネリック医薬品の認知状況との関係を Fig. 4 に示す。ジェネリック医薬品という言葉を知っている群においても、服用中の薬にジェネリック医薬品が含まれているかを明確に把握しておらず、「わからない」と回答した患者が 56.0 %を占めた。

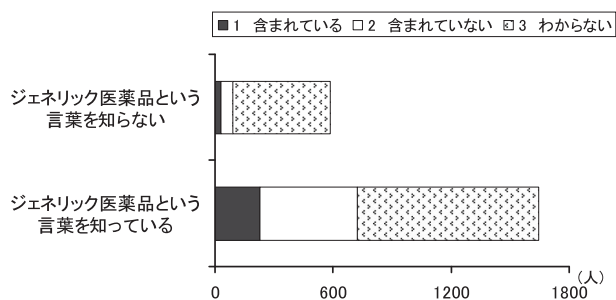
2-4. ジェネリック医薬品の使用に関する意識

「ジェネリック医薬品の使用に関して、医師・薬剤師に相談されたことはありますか」(設問 8) に、8.3 %が「はい」、84.3 %が「いいえ」と回答した。認知状況により比較した結果、「はい」と回答した患者は、ジェネリック医薬品という言葉を知っている患者で 11.1 %、知らない患者で 1.6 %であった。したがって、ジェネリック医薬品という言葉を知らない患者で相談していない傾向が認められた。

Table 6 患者によるジェネリック医薬品の服用希望と服用拒否理由 (設問 4,5)

回答	回答率 (%)
はい	39.1
いいえ	11.6
今の薬を変えたくない	31.4
効果に不安がある	19.2
副作用に不安がある	16.0
その他	33.3
どちらでもない	40.3

Fig. 4 現在服用中のジェネリック医薬品に対する患者の認識への認知度別解析 (設問 6)



2-5. 薬剤費に対する意識

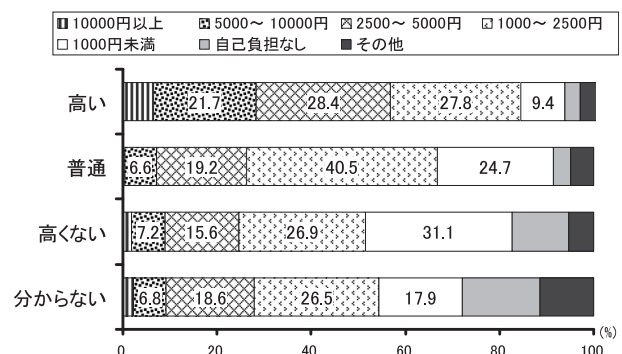
「薬の費用が高いと思いますか」(設問 9) に対し、34.0 %が「高い」、29.3 %が「普通」、7.2 %が「高くない」、29.5 %が「わからない」と回答した。そこで、薬剤費に対する意識と実際の薬剤負担額との関係を検討するため、「1 ヶ月の薬の費用は大体どの程度でしょうか」(設問 10) に対する回答を、薬剤費に対する意識 (設問 9) のそれぞれ 4 群に分けて検討した (Fig. 5)。その結果、「高い」と回答した群では患者の 56.8 %が 2500 円以上であった。「普通」や「高くない」と回答した群では、2500 円以下の患者が約 70 %を占めた。したがって、薬剤費が 2500 円以上であると患者の印象では「高い」と感じるものが示唆された。

ジェネリック医薬品の認知状況により対象を分け、薬剤費に対する意識を検討した結果、「高い」と回答したのは、ジェネリック医薬品という言葉を知っている群では 39.7 %、知らない群では 18.7 %であり、「わからない」と回答したのは、ジェネリック医薬品という言葉を知っている群では 25.1 %、知らない群では 41.0 %であった。認知状況により薬剤負担額に差は認められなかったため、ジェネリッ

Table 7 現在服用中のジェネリック医薬品に対する患者の認識 (設問 6)

回答	回答率 (%)
含まれている	10.3
費用が安くなった	59.2
効果が上がった	5.7
効果が下がった	0.4
その他	34.7
含まれていない	22.7
わからない	57.4
その他	9.6

Fig. 5 薬剤費に対する患者の意識別 1 ヶ月平均薬剤費 (設問 5,6)



ク医薬品という言葉を知っている患者ほど、薬剤負担に対して「高い」という意識が強く、ジェネリック医薬品という言葉を知らない患者ほど、薬剤負担に対して関心が低いことが示唆された。

3. 学生アンケート結果

「もし患者としたらジェネリック医薬品を服用したいと思いますか」（設問3）に、「はい」と回答したのは講義前44.8%であったが、講義後72.9%に増加した（Table 8）。また、「回答なし」の学生は講義後認められなかった。「いいえ」と回答した学生は、講義前20.8%であったが、講義後6.3%に減少し、その理由として「わからないため先発医薬品がいい」と回答した学生は、講義前は31.9%であったが講義後は0%であった。「分からない」、「どちらでもない」あるいは「回答なし」など、明確な意思を示さない回答は、講義前と比較して講義後は40%減少した。「親族に患者がいたらジェネリック医薬品を勧めますか」（設問5）に「はい」の回答は、講義前29.8%から講義後57.8%と約2倍に増加した。また、「どちらでもない」の回答は講義前50.8%から講義後34.4%に減少した。「ジェネリック医薬品の使用に賛成でしょうか」（設問6）に「賛成」の回答は、講義前88.0%から講義後96.9%に増加し、講義後には「回答なし」は0人であった。

考 察

1. 薬剤師対象アンケート結果

1-1. ジェネリック医薬品に対する意識

病院薬剤師および保険薬局薬剤師を対象としたアンケート結果より、薬剤師はジェネリック医薬品の

使用は賛成する一方で、ジェネリック医薬品へ変更を勧める割合は半数以下であった（Table 5）。ジェネリック医薬品への変更を勧めていない理由として、情報不足や在庫管理などが挙げられていたが、病院薬剤師で最も高い回答は「その他」であった。変更不支持理由として現在までの調査で多くを占めてきた「情報不足」、「安定供給」、「安全性」など以外に、病院薬剤師には漠然とした不安が存在することが示唆された。

1-2. ジェネリック医薬品に対する意識と年齢および施設差

ジェネリック医薬品への変更の働きかけは、病院薬剤師では、年齢が高くなるにしたがい増加傾向にはあったものの70%以上の薬剤師が変更を勧めていなかった。一方、保険薬局薬剤師では、40代の薬剤師がジェネリック医薬品への変更を積極的に勧めており、20代および30代の薬剤師では約半数がジェネリック医薬品への変更を勧めていた。また、ジェネリック医薬品に関する情報の収集希望は、保険薬局薬剤師では年齢に関わらず、約70%以上であり、保険薬局薬剤師はジェネリック医薬品に関する情報の収集を強く望んでいることが示唆された。一方、「どちらでもない」との回答が病院薬剤師で多く認められ、これは年齢の上昇とともに増加傾向にあった。薬剤師はジェネリック医薬品に対する情報収集の必要性を感じており、ジェネリック医薬品への変更も勧めているが、本研究結果では、ジェネリック医薬品に対する関心度は年代、在籍施設が病院であるか、保険薬局であるか、などにより異なることが認められた。

2. 患者対象アンケート結果

2-1. ジェネリック医薬品の認知状況

2006年に実施された外来患者におけるジェネリック医薬品の認知に関するアンケート調査では「後発医薬品を知っていますか」に対して49.4%の患者が「知っている」と回答した³⁾。本研究結果では70.0%で増加傾向にあり、情報源の多くをテレビが占めていた。日本薬剤師会による保険薬局対象調査でも、ジェネリック医薬品に変更された理由として一部負担金の軽減とテレビなどのコマーシャルによる影響が挙げられている⁴⁾。一方、本研究結果

Table 8 学生によるジェネリック医薬品の服用希望と服用拒否理由（設問2）

回答	講義前 (%)	講義後 (%)
はい	44.8	72.9
いいえ	20.8	6.3
効果に対して不安がある	46.8	57.1
副作用に不安がある	10.6	35.7
わからないため先発医薬品がいい	31.9	0.0
その他	10.6	7.1
どちらでもない	31.3	20.8
回答なし	3.1	0.0

ではジェネリック医薬品について薬剤師から情報を得たと回答した患者はわずか5%であり、医療機関からの情報発信が弱いことが示唆された。

ジェネリック医薬品という言葉の認知状況には年齢のばらつきが認められ、知らない患者ほど有意に高齢であることが明らかとなった。Tanaka et al. も同様に、ジェネリック医薬品の認知率が低い患者ほど、有意に高齢者であったことを示している³⁾。また、ジェネリック医薬品の認知率が低い患者ほど、薬剤の費用についても関心が低い傾向が認められた。

2-2. ジェネリック医薬品に対する意識

ジェネリック医薬品を実際に服用したいかという設問に「はい」と回答した患者は43.0%であり、「いいえ」と回答した患者は12.8%であった。「いいえ」と回答した患者の理由で「今の薬を変えたくない」が最も上位を占めていた。効果や副作用の懸念以外に、薬の変更を望まない理由の検討は今後の課題であるが、日本薬剤師会による調査⁴⁾では、「普段から使い慣れている薬が良いから変更したくない」との回答が多く、効果や副作用に対する説明だけでなく、ジェネリック医薬品への変更に伴うパッケージ、薬剤の色や形、名称変更が、薬剤の効果発揮に影響を及ぼさないことなど、医師や薬剤師による説明が必要であることが示唆された。

ジェネリック医薬品という言葉を知っている患者のうち、服用中の薬にジェネリック医薬品が含まれているか「わからない」と回答した患者は半数以上を占めたにもかかわらず、ジェネリック医薬品の使用に関して医師・薬剤師に相談したと回答したのはわずか8.3%であった。2006年9月の公正取引委員会の報告では「ジェネリック医薬品がどのようなものであるか知っていますか」の設問に対して「知っていた」または「なんとなく知っていた」と回答した消費者を対象に、ジェネリック医薬品の処方経験について回答を得た結果、「処方されたことがある」と回答したのは9.9%にとどまった⁵⁾。本結果でも、服用している薬にジェネリック医薬品が含まれているかわからない患者が多数を占め、医療機関が患者に対しジェネリック医薬品について十分な説明ができておらず、患者も相談をすることができていない現状が明らかとなった。保険薬局における患者一人

当たりの平均説明時間は、ジェネリック医薬品を選択した場合より、選択しなかった場合の方が時間は短いという報告もある²⁾。医療機関などで説明をする時間を取ることができない患者に対しては、パンフレットなどの活用や、ジェネリック医薬品に対する相談窓口などを設け、ジェネリック医薬品の安全性と有用性などを、保険薬局や病院に来院あるいは来院した時だけでなく常時啓蒙する必要があると考える。

3. 学生対象アンケート

患者対象アンケート結果より、ジェネリック医薬品という言葉を知らない患者は、年齢が高く、ジェネリック医薬品に対する認知や服用中の薬や医療費に対する関心なども低い傾向が認められた。そこで、ジェネリック医薬品の認知状況に対する教育の効果を考察するために、本学において学生を対象にジェネリック医薬品に関する講義の前後にアンケート調査を行った。その結果、「ジェネリック医薬品を服用したくない」理由である「分からないから先発品がいい」と回答した学生は、講義後は0名であった。「ジェネリック医薬品の使用の賛否」については、明確な意思を示さない「回答なし」が2.1%から0%に減少し、ジェネリック医薬品に関する講義を通じ、医療におけるジェネリック医薬品の考え方を習得することができたことが示唆された。したがって、教育による正しい知識の習得は、ジェネリック医薬品への理解を深め、自分が服用する医薬品を自己選択する機会を与えることも可能にすると考えられる。患者にも、医師や薬剤師など専門家のアドバイスのもと、自分の薬は自分で選択してもよいという意識改革も必要であるとする。また、国民に広くジェネリック医薬品を浸透させるためにはテレビや新聞からの情報提供では不十分であり、保険薬局や医療機関のみならず、学会なども有効に利用し、積極的な啓蒙活動が重要であることが示唆された。

4. 問題点と今後の指針

2008年4月より変更された処方せんでは、ジェネリック医薬品への変更を原則認められることになる。したがって、今後は保険薬局でのジェネリック医薬品の使用は増加すると考えられ、薬剤師に対す

る期待はますます高まる。本結果では、病院薬剤師と保険薬局薬剤師共に、ジェネリック医薬品の使用には強く賛成していることが認められた。しかし、使用に関しては同等性や情報不足の点で不安を持っていることや、実際に患者としてジェネリック医薬品を服用するには迷いがあることが明らかとなった。2006年10月に保険薬局にて実施された調査では、半数の薬剤師がジェネリック医薬品を支持しておらず、ジェネリック医薬品の品質や情報に対する不安から使用を支持しないという回答が多数であった⁶⁾。しかし、迷っているにもかかわらず、ジェネリック医薬品の情報収集の希望については「いいえ」あるいは「どちらでもない」の回答が今回の調査から得られたことより、ジェネリック医薬品に対する意識の低さが明らかとなった。ジェネリック医薬品に対して漠然とした不安はあるが、不安を解消させるための情報の収集はすすんでおらず、患者に対して積極的にジェネリック医薬品の使用を推進することができないだけでなく、薬剤師自身もジェネリック医薬品を服用することに迷いがあることが明らかとなった。ジェネリック医薬品の利用は、医療費の削減を果たすだけでなく、医薬品を社会的財産として利用する段階として重要である。ジェネリック医薬品の安心使用促進アクションプログラムには、安定供給に対する取り組みや、品質確保に対する取り組み、そしてジェネリック医薬品メーカーによる情報提供に対する取り組みが挙げられている⁷⁾。また、2007年5月より、ジェネリック医薬品の使用促進を図るための環境整備の一環として、独立行政法人医薬品医療機器総合機構は、ジェネリック医薬品に係る薬の電話相談業務も始めた⁸⁾。ジェネリック医薬品に対する不安を解消する環境は年々整えられており、薬剤師は薬物治療に対して適正使用を推進するだけでなく、今後はジェネリック医薬品推進のためのコーディネーターとして、良質なジェネリック医薬品の使用促進によりコストにも配慮をしなければならない時代となった。薬剤師は、先発医薬品かジェネリック医薬品かという対立的な捉え方ではなく、ジェネリック医薬品に対して正しい知識や情報を収集し、経済的メリットも考

慮に入れ、患者の健康やニーズにあった意味のある医薬品を選択する使命を持つという意識改革も必要であると考え、このアンケートを通じてジェネリック医薬品を服用したいと考える患者の背景因子の更なる分析を行うと同時に、大学においても効率の良いジェネリック医薬品の普及活動を目指し、薬剤経済分野におけるジェネリック医薬品を含めたコストに関する教育、ジェネリック医薬品に関する研究発表や情報の公開、地域および卒業生を対象とした薬剤師教育などによりジェネリック医薬品の普及に対する貢献が期待される。

謝 辞

本調査を行うに当たり、ご協力をいただきました新潟県薬剤師会、新潟県病院薬剤師会、医療機関、患者様に深謝いたします。

参考文献

- 1) 厚生労働省. 平成17年度国民医療費の概況. <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-iryohi/05/dl/data.pdf>
- 2) 厚生労働省. 診療報酬改定結果検証に係る特別調査(平成19年度調査)後発医薬品の使用状況調査結果概要. <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/11/dl/s1107-3a.pdf>
- 3) 田中宏治, 小原拓, 大久保孝義, 小林満, 高橋則男, 高橋将喜, 生出泉太郎, 今井潤: ジェネリック研究, 2007; 01: 092-101.
- 4) 日本薬剤師会. 平成18年度診療報酬快速に伴う後発医薬品の使用状況に関するアンケート調査(第2回). <http://nhj.or.jp/pdf/PDF0027/F002794.PDF>
- 5) 公正取引委員会. 医療用医薬品の流通実態に関する調査報告書. <http://www.jftc.go.jp/pressrelease/06.september/06092702-hontai.pdf>
- 6) 中島幹郎, 山下千恵, 田代浩幸, 川原利春, 永田修一, 中村博: 処方せん様式変更に伴う後発医薬品の利用状況の変化と薬剤師の意識. ジェネリック研究, 2007; 01: 111-7
- 7) 厚生労働省: 後発医薬品の安心使用促進アクションプログラム. ジェネリック研究, 2007; 01: 131-5.
- 8) 春山尚美, 黒田伸子, 小西政子, 白土道雄, 滝口紀子, 竹内淳美, 富田紀子, 藤上雅子, 松村好雄, 宿前貴子, 山田幸子, 小島千枝, 黒羽真吾: 独立行政法人医薬品医療機器総合機構くすり相談窓口が行う後発医薬品に係る相談業務. 日本薬剤師会雑誌, 2007; 59: 1861-3.